

編集後記

石川県立看護大学の平成28年度年報をお届けします。今回初めて、自己点検評価報告書と合本のスタイルでの発行となりました。

年報のページを繰るごとに、委員会活動、研究・地域貢献など、本学教員の多方面に亘る活動を振り返ることが出来、巻頭言に記された本学の目指すところ、すなわち、地域に密着し、かつ地域への貢献と国際貢献をめざすlocal+global=glocalな方針に沿った活動記録となっていることが改めて理解されます。一方で、年報の性格上仕方のないことですが、本学の最大の使命である看護基礎教育における教員の活動については、自己点検・評価のデータベースとなる記録がほとんど残らないことに改めて気付かされます。

看護基礎教育の拠り所としては、平成23年に日本看護系大学協議会がとりまとめた『学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標』の5群20項目（通称コア・コンピテンシー）があります。しかしながら、具体的な細目は「看護に必要な人体の構造と機能について説明できる」・「主要な疾病の症状、病因、病態、治療、予後について説明できる」・「重篤な状態にある患者の疾患・病態・症状について説明できる」など、それぞれが多くの内容を包含する項目が「インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオンについて説明できる」と同じタッター一行で記載されているに留まり、平成28年度の日本看護系大学協議会の声明においても「分野別評価の制度化が急務でありそのためにはコアカリキュラム策定の必要性が高まっている」と述べられています。そしてついに平成29年7月、大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会により『看護学教育モデル・コア・カリキュラム（案）』が公表されました。これにはパブリックコメント募集に対して3800もの意見が寄せられた由ですが、インターネット上に公表されている実際の意見を拝見すると、コアカリキュラムの意味を誤解されている上での反対意見が目につきます。本来、コア・カリは、到達すべき能力の獲得に最低限必要とされる具体的な学習項目、マストアイテムを明記したものであり、各大学の特色ある教育方針やコアとなるコンピテンシーと相容れないということはありません。必要最小限のマストアイテムを決め、それらはどの大学でも共通して十二分な学習到達度を社会に対して担保すること、その上で、各大学のポリシーに沿った特色ある教育を展開することを可能とするためのコア・カリであることをまず理解し、さらに、これまでの旧習に囚われない、時代の要請に応える事ができる新たな看護基礎教育の在り方を、我々自身の手で構築して行く必要があると痛感しています。平成29年9月付で日本学術会議から発信された『大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 看護学分野』には、今後の看護基礎教育の方向性に重要な指針となるメッセージが述べられています。編集後記の役割を越えるものとは承知していますが、以下にエッセンスを抜粋し、時代の要請に応える新たな看護基礎教育を展望したいと思います。

『大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 看護学分野』

日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分会（平成29年9月29日付）

「(前略) 看護学教育は、その卒業要件が保健師助産師看護師法の国家試験受験要件を満たすことが前提であり、技術が安全に提供できるかを卒業前に確認することは社会への責任として重要である。国家試験への合格は、看護学教育のある一定の基準を担保するに過ぎない。加えて、看護学教育界は社会への説明責任のためにも卒業時に到達すべき能力を明確にし、看護の技術を評価する仕組みを持つべきである。(16頁中段) (中略)

加えて学士課程教育としての看護学教育は、指定規則に基づく教育内容にとどまらず、現実のニーズの変化を先取的にとらえ、学問としての発展をにらんだ創造的、かつ各大学の独自性・特殊性を盛り込んだ教育内容を目指すべきである。

有能な看護師のマンパワー不足は依然として深刻であり、国民のニーズに対して質の高い看護専門職を輩出するという大学教育としての看護学教育に課せられた責任は大きく、今後は指定規則などの規制によらずとも大学教育の基準によって看護の質を担保して、卒業時の実践能力を保証して、看護師免許の前提とすることができるものと思われる。

このように看護学教育の高等化が進む中で、看護が担うべき役割は拡大の一途をたどっている。超高齢社会が進展する日本において、在宅医療の推進が加速する中、看護専門職に対する国民の期待は高まっている。生活の場で人々の健康に寄与できる看護専門職のさらなる役割拡大は、看護学教育の高等化と両輪となって、看護学の発展を促し、ひいては国民の福祉に寄与するものとなる。

古来より看護は人間と共にある普遍的な実践であり、学問としての歴史は浅いが、現在は、世界の多くの国において、学問化され教育体系が確立されつつある。看護学教育のグローバル化も今後さらに進展していくものと思われる。そうした世界の水準を、学問的にも教育的にも実践的にも担保してゆく努力が、我が国の看護学教育に期待されている。」

年報編集部会長
健康科学講座教授 多久和典子
第24-25期 日本学術会議会員